様式第２号（８関係）

会　議　録

<table>
<tr><td colspan="2">会　議　の　名　称</td><td>令和６年度ひたちなか市総合教育会議</td></tr>
<tr><td colspan="2">開　催　日　時</td><td>令和７年１月３１日（金）　午後３時００分から
午後４時３０分まで</td></tr>
<tr><td colspan="2">開　催　場　所</td><td>ひたちなか市役所　第３分庁舎　防災会議室１・２</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出席者</td><td>委員（者）氏名</td><td>ひたちなか市長　大谷　明
ひたちなか市教育委員会
教育長　秋本　光徳
委員（教育長職務代理者）　佐藤　達
委員　鬼澤　宏幸
委員　大塚　佳代子
委員　原　嘉昭</td></tr>
<tr><td>担当部課職員職氏名</td><td>（市長部局）
総務部長　小倉　健
総務部参事兼総務課長　西野　浩文
総務課総務係長　永井　慎
総務課総務係主任　及川　誠二郎
企画調整課長　大谷　宏
市民活動課長　鯉沼　光人
生涯学習課長　前橋　大介
スポーツ振興課長　住谷　太一
（教育委員会事務局）
教育部長　箱﨑　勝子
教育委員会事務局参事兼指導課長　飯村　祐一
指導課長補佐兼教育研究所長　國府田　庄一
指導課長補佐　加藤　理
指導課指導主事　黒澤　友博
指導課社会教育主事　渡邉　秀幸
総務課長　田口　清幸
総務課長補佐兼係長　菊池　徳
学校管理課長　橘　和典
保健給食課長　金澤　幸浩
青少年課長　植野　健一</td></tr>
</table>

会議次第及び会議の公開又は非公開の別	公開
傍聴者の数	０名

審議内容（発言者，発言内容，審議経過，決定事項等）

【１．開会】（西野総務部参事兼総務課長）

【２．あいさつ】（大谷市長）

【３．出席者紹介】（西野総務部参事兼総務課長）

【４．協議事項】

（１） 学校部活動の地域移行について

■飯村教育委員会事務局参事兼指導課長が資料を基に説明。

お手元にございます総合教育会議資料①「学校部活動の地域移行について」をご覧ください。

まず資料のスライド１ページから４ページ，１枚目の裏になりますが，１ページから４ページにつきましては，内容項目の１つ目「国・県の動向等について」記載してございます。学校部活動の地域移行に至る背景，地域移行の目的や方向性，地域移行の環境整備，地域移行に向けたスケジュールについて，国・県が示している方針を示してございます。

続きまして，項目の２つ目，本市の現状につきましてですが，５ページから１１ページに記載してございます。

令和６年度５月の時点で，本市の中学校，義務教育学校後期課程に在籍している生徒のうち，８９．４％にあたる３，３５４人が部活動に加入している現状でございました。また，過去６年間の生徒数の推移をみると，生徒数は徐々に減少する傾向にあり，部員数の減少による活動への影響が見られる状況となってまいりました。さらには，令和５年度より，中学校体育連盟主催の大会参加規定が変更となり，中体連に加盟すれば，地域クラブも大会参加が可能になったことから，生徒の活動の環境も少しずつ変化がみられる状況となっております。

続きまして項目の３つ目，本市の基本方針と取組概要につきましては，スライド１２ページから１７ページに記載してございます。

本市の基本方針としましては，令和７年度末までを目標に，休日の学校部活動を地域クラブ活動へ完全移行することとしております。これにより，生徒たちが地域での活動を通じて，多様な体験を積むことができる環境を整えることを目指しております。なお，平日の学校部活動につきましては，当面継続することとしており，休日の整備状況を勘案しながら，平日の部活動についても，改めて検討を続けてまいります。

スライド１４ページをご覧ください。

こちらにつきましては，地域クラブ活動について，現時点での本市の基本的な考え方を示しております。それぞれの項目について，今後さらに検討を続けながら，環境の整備を進めてまいりたいと考えております。

続きまして，スライド１５ページから１７ページにつきましては，今年度から始まった地域クラブ活動の紹介となっております。

「ひたちなか市バレーボール教室」は，国庫補助金を活用した実証事業として，１０月から地域クラブ活動を開始しております。

また，「ひたちなかベースボールクラブ」，「ひたちなかフィルハーモニーウインドオーケストラユース」につきましては，地域の団体との連携により，地域クラブ活動を新設し，こちらは１２月より活動が始まった事例となっております。

いずれの活動におきましても様々な課題が出ていると思いますので，そうした課題等を共有し，地域クラブ活動を他種目にも広げられるように，改善策等を検討してまいりたいと考えているところです。

以上が，総合教育会議資料①「学校部活動の地域移行について」の説明になります。

続きまして，総合教育会議資料②「学校部活動の地域移行に向けたスケジュール」をご覧ください。

こちらは地域移行に向けたスケジュールを示してございます。今後は具体的な形が整備できるよう関係団体とのヒアリングを実施するとともに，各校及び各種目の専門部との情報を交換しながら，環境の整備を進めてまいりたいと考えております。

また，そちらの表にもございます各種広報活動を行うことで，児童生徒・保護者・地域の方々に周知が図れるように進めてまいります。

最後になりますが，総合教育会議資料③「今後の検討事項（案）」をご覧ください。

本市におきまして，先の１月２２日に学校部活動地域連携地域移行推進協議会を設置いたしました。

こちらに書いてあります様々な検討事項につきましては，今後実施する協議会において，各団体等のご意見を頂戴しながら，協議を進めてまいりたいと考えているところでございます。

簡単ではございますが，説明は以上でございます。

■教育委員会委員等による意見交換が行われた。意見交換の内容は以下のとおり。

〔大谷市長〕

このあとは，特に縛ることもなく，各委員の方々にそれぞれお話しをしていただこうと思います。また，資料等で質問等がありましたら，都度，言っていただければ，教育委員会に答えていただこうと思いますが，いかがでしょうか。

地域移行，部活動に関して，率直な感想・意見，ここが気になっているなどござ

いますか。
〔原委員〕
現状の確認ですが，先ほど中学生の部活の加入率はおよそ９０％ということで，部活動に加入していない人たちの理由はどのようなものか。また，今移行しようとしている週末部活動ですが，現状は週末どれぐらい部活動が行われているのか。そのあたりを把握させていただきたいと思います。
〔教育委員会指導課〕
部活動に入っていない理由としましては，生徒から直接聞いたわけではないのですが，地域のクラブ活動に加入していて，学校の部活動には加入していないというようなお子さんも多くいるかと思います。また，土日の休日については家でゆっくりしたいと，家族と一緒に過ごしたいという考えを持っているお子さんもいるのではないかと推察しております。
現状の休日部活動の回数，時間になりますが，休日は土曜日・日曜日のいずれか１日の活動となっております。基本的には練習の場合には上限で３時間の活動というものがクラブ活動ガイドラインの方で定められておりますので，原則練習は３時間となっております。ただ，大会等の場合にはこの限りではないと定められております。
〔秋本教育長〕
子どもたちは何をしているのかということですが，経緯がございまして，全国的に中学校において，部活動全員加入というのが当たり前のように行われていた時期がありましたが，従来，学習指導要領には「部活動は自主的・自発的な活動である。」と示されており，平成３０年の文部科学省からのガイドライン策定の際に「部活動の加入を全員に強制するのはおかしいであろう。」とスポーツ庁等から意見がありまして，それで部活動全員強制加入という流れはやめましょうと変化してきていると思います。ですから，何もやってない生徒さんもいると思います。
〔大谷市長〕
私が中学生の時も特別強制加入ではなかったので，特定の部活動に入っていない方もいらっしゃいました。少子化によって，多くの人数が必要なスポーツ，もしくは吹奏楽などは，現状すでに複数の学校の子たちと一緒にチームを組む必要があったり，部活動を変えていかなければいけないというのは，そのような事情もあるかと思います。一方で，この土曜・日曜に関しては教職員の部活動への関わりというのも，文科省の方から，基準が示されているというなかで，例えば，佐藤委員は長く教職員を勤められ，部活動との関わりもあったと思うのですが，教職員の視点からこの地域移行というものを見たときに，どういうふうに思うのか。教えていただきたいのですが，よろしいでしょうか。
〔佐藤委員〕

私は中学校で９年働いた経験がございまして，昔は土曜日に授業がありました。土曜日の午後は部活動です。日曜日は練習試合があります。そうすると１年間休みがありません。休みと言えるのはお正月くらい，というような状況で，部活動を受け持つ先生の中には運動はほとんどやったことない先生もいて，喜んで部活動を受け持っている先生ばかりではありませんでした。先生によって温度差があったと思います。教材研究もあるなかで大変でしたが，いい面もあります。部活動を引退した後も，未だに集まろうって言って集まったりもします。

今回，部活動を地域移行していくにあたり，心配な点は引率についてです。平日は会社員だったり，公務員だったり勤められている方が地域のクラブ活動の指導者として活躍されているなかで，休みの日に引率をお願いするということは，かなりハードルが高いのかなって思っているのですが，ひたちなか市では学生さんがたくさんいると思います。そのような学生さんとタイアップして，やっていくのが１つではないかと考えます。

〔大谷市長〕

受け皿の中での指導者の確保，それから大会の引率等々の課題を挙げていただきました。学校は子どもたちが普通に通うわけですが，違う場所で練習をするときには，今度は保護者がそこまで連れて行かなければいけないと，地域のクラブ活動への移行をしていくにあたり，保護者の役割，保護者の負担というのも生じていくだろうと思います。保護者目線で地域移行を今どのようにとらえているのか，どのようなことを確認しておきたいところなのか等々，大塚委員の方からご意見をいただければと思います。

〔大塚委員〕

まず，私自身小学生の保護者でありながら，中学生のお子さんを持つ親御さん方とも交流があるのですが，その親御さん自身が熱心に部活を行っていた方ほど，この部活動の活動縮小であるとか，部活動の休日の地域移行というところに，なかなか理解を得られていない現状がございます。

部活動の地域移行は，先生方の働き方改革ということが大きくありますが，生徒側にもクラブチームの専門の方に教えてもらうことができると，互いにＷＩＮ－ＷＩＮなのではないかと思います。今まで弱小チームであったのに，もしかすると強いチームになるかもしれないというところで，ものすごくメリットがあるっていうところを，まず保護者に伝えていくことが大切ではないかと思います。保護者の方々は部活動が縮小してしまうので，よくない方に向かっているのではないかと，そう思っていると感じています。でも実際，校長先生とかとお話すると，かえって部活動の地域移行は少子化もございますし，いいのではないかと思います。

ただ，今までは中学校での活動で送迎の必要もなく，練習していけたのが，地域移行することにより，その保護者の負担，送迎に関しては特に不安があると聞こえ

てきております。
〔大谷市長〕
あと，資料①に記載されております，地域クラブ活動の実証実験であります「ひたちなか市バレーボール教室」ですが，活動が５００円／月と，今は国費が入っているとは思いますが，採算に合わないと思います。
強いクラブチームに子どもを預けますと，今の月謝はどのぐらいなんですかね。一方で，身体を動かして楽しみながらスポーツをすればいいという場合の月謝はどれくらいになるのでしょうか。選択肢があるという状況をまず作る必要があると思うのですが，それによって負担する金額も，もしかしたら違ってくると思うんですよね。
そのあたり，保護者の方々に対して，こういうことだからこの金額なんだって，提示するような形にもしかしたらなると思うのですが，そのあたりのプラスアルファの費用がかかってくることに関して，何か思うこととかありますか。
〔大塚委員〕
先日，中学校の学校説明会に伺い，校長先生からいろいろご説明いただいたんですけど，やはり部活動によって，その年間のかかる費用が全く違うっていうのを私知らなかったんです。
そういう情報って私も初めて聞きましたし，やはり事前に月謝がどれぐらいかかるかとか説明をやはりしていただきたいと思います。もし，クラブチームにお子さんが入りたいって言ったときに，楽しく通うのだったらっていうことでおっしゃる方もいますし，やっぱり今は貧困世帯も増えているということを学校の先生からも伺っておりますので，やむを得ず諦めないといけないという貧困世帯の金銭的支援とかも，前向きにご検討いただけたらなと思っております。
〔大谷市長〕
ありがとうございます。鬼澤委員からは，ご自身が部活動に関わってきたご経験の中からということもありますし，また地域を支える企業の立場から，広く子どもの育成，そして部活動が子どもの育成に与える影響って非常に大きいなかで，産業界として取り組めそうなこと，もしくはそこに囚われず，鬼澤委員の方から何かご意見あったら教えてください。
〔鬼澤委員〕
地域のクラブ活動というのが，今後どのような組織になっていくのかって大変関心があります。クラブ活動の費用面など，やったのはいいけど継続してできるのかと。そういう問題が起こったとき，どうするのか，そのようなことはすごく考えますね。
だから，このひたちなか市において，産業界からクラブ活動に対して，何らかの支援を行うというようなことはこれから大切になるのではないか。これから，どこ

に投資をするとなったら，子どもたちに投資しなきゃいけないですね。そのような環境は，回り回って自分たちに来るっていうことを考えれば，何らかの協力はしていくのではないか，ただその受け皿みたいなのをどうやって作っていくかということがすごく重要になるのではないかと思います。

〔大谷市長〕

ひたちなか市は比較的ですね，既存のスポーツ団体が多いというところがあって，少年団であったり，スポーツ協会の団体，今まさにそことのお話をさせていただいていて，既存団体の中に，中学生を土日に入れ込めないかとお話をしています。この方針が一番ひたちなか市はメインになってくるのかなと思います。プラスアルファ，プロチームのユースとか，レベルを高くやりたいという方はそっちに行ってもらうと。

あと，どうしてもその隙間になってしまうような競技・種目は，今この実証実験が行っているみたいに，新たにクラブチームを立ち上げて，そこを受け皿にするということもあるかと思うのですが，優先順位として今私たちが取り組んでいるのは，既存のスポーツ少年団，もしくはスポーツ協会の団体がいかに受け入れてもらえるように整備をしていくのかということが大切になると感じています。

ただやはり話を聞いてると，例えばバスケットボールひとつにしても，年代で大きさが違うとか，ゴールの高さが違うとか，バレーボールもネットの高さが違うとか，それが一緒になったときに，どういうような指導ができるのかという話であったりとか，課題はあると考えております。現状として秋本教育長，その辺りの受け皿の話ってどのように聞こえていますか。

〔秋本教育長〕

基本的に少年団であれば，小学生と中学生の使う道具に規格に違いがなければおそらくスムーズにいくと思います。備品などにしましても，あとは少年団の方々は小学生をメインに教えていらっしゃいますので，そこに少しレベルの高い中学生が入ってきたときに，その指導という点で，自信がないですとおっしゃる方もいるかもしれないです。指導者という点で心配な点はそこですね。

今実際にヒアリングをしている最中ですが，もしかしたら中学生用の指導者をプラスで探してくれれば，少年団の中に受け入れてもいいですよっていう方々が多いのかもしれないかなという仮説を持ちながら，ヒアリングを進めようとしているところです。

〔大谷市長〕

地元企業として部活動などの活動に対して積極的に関わっていただく。特に金銭的にも関わっていただくという中で，こういった企業に支えられて自分たちの活動が行われているんだよ，ということを知っていただくような，そういう機会も，私は大切なのかなあというふうに思っておりまして，鬼澤委員の方から企業でも関わ

るその意味はちゃんとあるんだよという，非常にいいメッセージをいただいたなと思っております。

それでは，高専の先生であります原委員の方からもご意見いただければと思います。

〔原委員〕

高専も同じく週末の部活の顧問がありますね。部活のために教員が来なきゃいけないということは，できるだけなくしたいという方向ですが，今のところはちょっと良い案がなくてですね。それで，それぞれの部に顧問が来るのではなくて，顧問同士で連携を組みまして，土曜日は１人の教員が来て，それぞれの部活動，いろんな部を見ると，そういうような工夫をしております。

ですので，この件に関してどう動いていくのか私も非常に興味があるのですが，今も話を聞いていてやはり保護者をどう説得するか，ということがすごく大事なのかなと思います。

やはり，送迎のことと，金銭面で，保護者の立場だと自分たちの負担が増えて，先生がラクしてるという風に，一方的な部分だけ見えてしまうかもしれませんから，事前にやはりこうすることのメリット，それをしっかり保護者に訴えることが必要だと思います。この計画を見ますと，保護者の意向調査はこの３月が最初の予定ということですかね。このように意向を聞くことはすごく大切だと思いまして，あと私が少し心配しているのは，令和７年度中に地域移行を完了するために，年度の途中である１月から地域移行をスタートする予定になっていますよね。今までは子どもに部活をさせられたけど，金銭面の問題からうちはできません，というようなケースが出てきてしまうと，年度の途中ですし，子どもさんにも気の毒かなと思いますので，そのあたりをうまく説得していく必要がすごくあるなと思います。

それともうひとつは，資料①の１１ページですね。ひたちなか市内の生徒が活動している少年団が記載されていますが，ひたちなか市外の水戸のクラブもあると思うんですよね。そこまで親が送るということは，やはり負担もかなり大きいと思いますので，出来れば指導者を派遣してくれるようなことができれば，土日はこの地域の中学校で，クラブ活動をやっていただけるようなですね，わざわざそのクラブのところまでみんなが行かなくてもいいようなことができるといいかなと思います。

高専には学生がおりまして，部活動が得意な者もいますので，中心となることは難しいでしょうけど，技術の指導とか，少しでも謝金が出れば喜んでやりたいという者も多いと思います。そのような面でも協力させていただければと思います。

〔大谷市長〕

学生さんに協力をいただくという佐藤委員の話の中でもありましたけれども，高専さんの皆さんに指導に行っていただく。また，移動のことを考えると子どもたち

を動かすよりは，指導者にその場所まで来てもらうというほうがいいのではないかと。その時に，学校の中での活動を，完全に外に任すということに関して，どのように整理していくのかということはあるかと思いますけれども，その方が多分現実的なんだと思います。

それから，やはり皆さん大会を１つの目標にして部活動をやっていることを考えると，今のスケジュールでは１月になっていますが，大きな大会が終わるのが１０月ぐらいで一息ついて，次の段階に入っていくという形になると思うので，そういった段階で選択ができるようにしていくことが必要なのかもしれませんね。子どもさんたちが，次の目標に向かって頑張っているときに，環境を変えさせてしまうのは，過渡期の中では一部出てきてしまう可能性はあるかもしれませんが，なるべくなくしてあげたいなと思います。

また，大塚委員からもありましたが，保護者への情報提供について，これから本格化させていくところですが，確かに部活動がなくなってしまうとかそのような誤解があるかと思います。だからこそ，そのご負担をかける部分ということも，なぜそうなのか，逆にメリットの部分もこういう部分があるのだと説明していく必要があると思います。

また，様々な選択肢があるなかで，部活動以外の過ごし方も視野に入ってくるのではないかなと思っているので，そのお子さんの過ごし方を一緒に考える機会にもしていただくような情報提供プラス，例えばこういうふうには考えられませんかというようなお話ができるといいですね。

この話をもう少し続けたいなと思うのですが，時間の制約もありますので，これだけは言っておきたいというような話があればお願いします。

〔大塚委員〕

地域クラブ活動意向調査が生徒さんと保護者向けに３回ほど実施される予定だと思いますが，地域の方々からの心配な声や不安の声というのは，部活動が行われない日の生徒さんたちの放課後の過ごし方であったり，クラブチームでの活動に参加しないお子さんが，例えば非行に走ったりしないか，地域で騒いだりしないだろうかという声も先生方は結構いただいているそうです。

土日の部活動に参加しない生徒さんに対する生活指導に関しては，保護者と学校，そして地域の３者間で密に連携をとりながら行っていく必要がありますし，もちろんその地域の方々にもこのような形で進めてまいります，ということでお知らせをお願いしたいのと，土日に部活動に参加しないということであれば，教育委員会主催の様々な体験イベントやコミセンが催しているユニークな体験の教室，現在，部活動があるからと中学の生徒さんの参加率が低いので，今まで参加できなかった行事，イベントにどんどん参加していただけるといいのではないかなと思っております。

〔大谷市長〕

やはり本人がどのように部活動に関わってきた人生だったのかによって，だいぶ部活動へのとらえ方は違いますよね。私も一生懸命やる部活に所属していたので，そこがぽっかり空いてしまうと。吹奏楽で朝，昼，夜とずっとやっていました。だから今も自身の過去の経験と同じようにやっていると思うものですよね。

でも実際，今はそのようなことなく，土日のどちらか一方のみ３時間を上限に練習をしているということで，自分の経験の中のものとは違いますから。そのことについて，しっかり伝えていかなければいけないと思います。

あと今すごくそうだなと思ったのは，部活動をやっているから出来なかった体験というのもあると思うんですよね。部活動をやっていたから，参加できなかったもの，ひたちなか市には確かにそういうものがたくさんあります。そのようなものの情報を入れながら，体験として非常に有意義だよ，ということがアナウンスできればいいですね。

〔鬼澤委員〕

極端な話，家にいても体験できるようなオンライン型の部活というんですかね，それはコストがかからないし，学べるエリアが広くなるし，まさに今のＡＩであるとか，ＩＴの世界も取り入れて部活動として学んでいく。尚且つ，その人材の育成にも繋がるというのも１つの方向としていいのではないかと思います。

〔大谷市長〕

鬼澤委員のご意見もまた素晴らしいですね。例えばその過渡期において，先ほどのボールが違う，コートの高さが違うといった課題があったときに，幸いにして現状平日は学校で活動を行っているので，そのような練習は平日やってください，と。土日に関しては，基礎的なことをやりましょう，ボールが使えなくても出来る練習がありますよねとか，そのようなこともしかしたら指導者の方でできるかもしれない。吹奏楽に関しては譜読みをやりましょうとか，オンラインでやりましょうとか，マウスピースの使い方をもう１回確認しましょうとか，そういう基礎練習をオンラインですることも出てくるかと思いますので，最善ではないかもしれないけれど，今できる最適なことは何なのかって考えると，色々なことができるんではないかな。

〔鬼澤委員〕

コストもあまりかからないので，参加しやすいかと思います。

〔大谷市長〕

ひたちなか市ではタブレットを持ち帰ってもらってますからね。そういう練習の仕方がありますね。特に人数が多いような，パートに分かれなきゃいけないような吹奏楽に関して参考にさせていただこうと思います。

では一旦この話題は区切らせていただいて，次のシビックプライドを育む，その

３０周年事業の中でどんなことをやってきたのか，という情報提供をいただいたあとに，お話を進めていこうと思います。

シビックプライドはですね，広い間口ですので部活動のあり方とか，部活動を行っていないとき，市で実施していることに関わるということも大切だよねとか，そういう話にも繋がると思いますので，部活動の話も絡めながら語っていただいてもいいのかなと思います。

それでは情報提供をお願いします。

（２）ひたちなか市誕生３０周年後の学校におけるシビックプライド教育について

■飯村教育委員会事務局参事兼指導課長が資料を基に説明。

では，本市の学校におけるシビックプライドの醸成に繋がる教育活動についてご説明いたします。

まず，総合教育会議資料の「■１　３０周年記念事業」についてでございますが，本市は今年度，市誕生３０周年を迎え，様々な記念事業を実施いたしました。別紙の①に示させていただきましたとおり，当初は３９事業であったところ，現在８１の記念事業を企画・実施するに至っております。

続きまして「■２　本市におけるシビックプライドの定義」につきまして，別紙２をご覧ください。

こちらはシビックプライドについて，市の企画調整課が作成した資料です。本市におけるシビックプライドの定義につきましては，資料のとおりでございますが，シビックプライドは郷土愛と完全にイコールではなく，生まれ育った場所に限定されないまちを良い場所にするために関わっているという，当事者意識に基づく自負心ととらえているところでございます。

そのようななか，教育委員会としましては，総合教育会議資料の■３に示しましたとおり，３０周年記念事業として，児童会生徒会交流会において，「私たちが創る，未来のひたちなか市」をテーマに意見交流会を実施いたしました。その意見交流会に先立ちまして，市の企画調整課の職員から，各学校の代表児童生徒に対して，シビックプライドについてオンラインで説明をしていただき，ひたちなか市の未来についての協議が深まるようにいたしました。交流会の当日におきましては，中学校ブロックを中心にして，中学生と小学生がグループとなり，住みやすい街にするためどのようなことが必要か。また，今，自分たちができることは何かについて意見を交流し，未来のひたちなか市について考えを深める場となりました。今後は，この意見交流会で出たテーマを３つに絞り込み中学生の生徒会本部役員がオンラインで意見交流会を実施する予定となってございます。

続きまして「■４　学校における地域学習の取組等」についてご説明いたします。市内各校においては，生活科や社会科，道徳を中心として，自分の地域について学

ぶ機会がございます。また，市内にある様々な施設を訪問し，体験活動を行っております。そして今年度につきましては，新規事業としましてひたちなかキャリア探検ラリーを実施いたしました。

これは，児童生徒が市内にある様々な産業分野のリアルを体験することで，やりたいことや，なりたいものを発見し，ひいては向学心につなげることができるようにすることを目的としております。

こちらは１２月２５日に実施いたしまして，市内の１６の事業所にご協力いただき，小学校５・６年児童６４名が参加いたしました。参加した児童からは，「ひたちなか市にすごい会社があることが分かってとても誇らしいです。」とか，「農業について詳しく調べたことがなく，とても勉強になった。」，「今後の学習にも生かしていきたい。」などの感想が寄せられ，シビックプライドや向学心にも繋がる事業となっております。

次年度につきましては，対象学年や協力いただく事業所を拡大し，より多くの児童生徒に体験してもらえるように準備を進めているところでございます。

次に「■５　シビックプライド醸成の位置付け」につきましては，各法令や条例，学習指導要領におけるシビックプライド醸成の位置付けを載せてございます。いずれもシビックプライドを醸成することの重要性ですとか，必要性が謳われているところです。

続きまして，「■６　本市の学校における自治的活動の実態」についてご説明いたします。児童会や生徒会の組織については，中学校においては，代表生徒を選出する選挙として実施しておりますが，小学校においては，ほとんどが各学級において代表委員として選出しているのが現状でございます。生徒会本部や児童会においては，学校生活向上のために，自分たちにできることを話し合ったり，イベントを企画したりする活動を多く行っております。

一方，各学級において事業として学級活動というのを行っておりますが，そちらでは，自分たちの学級を良くするために何ができるか，話し合ったり討議したりする機会を多く設けております。また，小学校においては，話し合いを進行する議長を輪番制で実施する学校が多いのが現状です。中学校においては，各クラスで選出されている学級委員が中心となって話し合いを進行しております。

続いて，市内の学校の自主的活動の好事例を載せさせていただきました。

まず，外野小学校においては，委員会活動とは別の組織として，ＳＯＳサークルというものを立ち上げ，例えば算数が苦手な児童をなくすために，算数クイズラリーを実施したり，啓発動画を制作したりするなど，児童が自発的，自主的に参画する学校生活づくりを推進しているところです。

また，美乃浜学園では５年生から９年生で組織される児童生徒会のメンバーがチームをつくり，行事の企画や校則の見直し等を話し合い，最終的に学校の管理職に

向けてプレゼンテーションを行う，そのような準備をしているところと聞いております。

さらに学校外での自主的活動といたしましては，勝田二中や佐野中では，地域で開催されるコミセン祭りへの出展を生徒自ら企画し，コミセン祭りの実行委員に働きかけ，実際に実現するというような取組がございました。

これらの自主的活動は，シビックプライドの醸成に繋がるものであると考えますので，本市の各小・中・義務教育学校において，さらなる活動の充実が図られるよう，今後も働きかけてまいりたいと考えております。

最後に載せてあります「■７　国政選挙における本市の投票率の推移」についてでございます。

選挙に関係するところですが，各学校で行っている主権者教育におきましては，自立した主体として，よりよい社会の実現を視野に，国家社会の形成に主体的に参画しようとする力，このような力を養うということが，文科省の資料の方に示されております。このようなことは非常に重要であると，こちらも認識しているところです。

学校教育においては，これらの力の育成を図りながら，主権者としての資質能力を身につけることができるよう努めてまいりたいと考えているところでございます。

説明は以上でございます。

■教育委員会委員等による意見交換が行われた。意見交換の内容は以下のとおり。

〔大谷市長〕

私の方から補足ですが，資料にあります別紙２右上の「シビックプライドにフォーカスした理由」の２段落目のところで市への誇りや愛着を感じる方ほど社会活動へ積極的に参加している。社会活動に積極的に参加している方ほど，市への誇り愛着を感じている。この相関関係が強いというところを調べてみますと，社会活動へ自分は積極的ではないが，人に誘われたからやった。それから，たまたまやった。要は，全然積極的ではない。そういう人も，市への愛着を感じるようになったという調査結果が出ておりまして，積極的でなくても何か地域に関わり合いがあると，自然と愛着って醸成されていくものなのかなと思います。

それとですね，次の３段落目のところなんですが，地域の大人と中学生を対象にした調査ですが，地域の大人と接する機会が多い，もしくは地域の人たちをよく知っている，と言ってくれている子どもたちはこのまちに住み続けたいとか，このまちが好きだとか，そういう傾向が高い。いわゆる多世代での交流が育んでいるのかなと思っています。

その他ですね，本当にこのまちにしかないものがあるとか，欲しいものがあるひ

たちなかが好きだとか，そういう唯一無二のものがあるとか，そういったものもあるとは思うんですけれども，やはり外から与えられたものを誇りに思うということプラス，内面から愛着が養われていくということもやっぱりありましてですね，そういったところと，教育現場というものが密接に関わっているだろうなと思うのですが，今日はそのあたりも踏まえながらですね，また産業とか，地域活動とか，いろいろやっていらっしゃる皆様方のご意見をいただきたいなと思っています。

まずは秋本教育長の方からですね，シビックプライドについて，教育現場の視点から今思っていることをご披露いただければと思います。

〔秋本教育長〕

中学校と高校が特に荒れた時期が８０年代にありまして，どうしてもある程度，教員が管理しなければいけないという時代があったものですから，アメリカから輸入したゼロ・トレランス教育もそうですが，もうゼロにならない場合は，警察にすぐ届け出るというような発想でしたけれども，それが今随分おとなしくなってしまって，反社会的な行為より非社会的な行為になっている生徒さんが増えて，不登校も増えてきているわけですけども。やはり，根底には承認欲求がまだまだ旺盛な若者たちが承認してもらえない，というようなこともあるでしょうし，おそらく承認要求を経てからの自己実現欲求なんだとは思いますが，そのプロセスにおいては，やはり思春期の非常に難しい多感な時期に，少しでも周りの友達と一緒に何かを話し合って決めて，先生方にも認めてもらえて，地域の大人の方々にも認めてもらえて，成し遂げたというような行為があると，自分にも自信が持てますし，自分の社会に対しても，傍観者ではなくて，まさに当事者になって誇りが持てます。シビックプライドっていうのは，その傍観者にならない，傍観者にならないことがシビックプライドの大事なところなのかなと思います。

それを鍛える場所が，学校の学級会の時間ですとか，そういう時間がある。ということなので，私の立場からすれば，学校教育の現場で，少しでもその未来の市民を，市民のシビックプライドを養うような取組ができればいいなと考えているところです。

〔大谷市長〕

確かにいじめの話でも日本は傍観者になる比率が他の国に比べて高いという話を私も県議会議員のときに指摘をしたことがありましたけれども，まさにそういった部分をどのように主体的に関わっていくのかと，自分たちが事態を解決する一員になるのだということを考えてもらえるような，きっかけをつくれるか，本当に大切な視点だなと思います。

原委員もまさに多感な子たちを受け持たれていて，さらに言うと，高専さんはこのひたちなか市民だけではなく，広く受け入れていただいている。あと原委員ご自身も，生まれはこちらではないけれども，こちらに住まわれているというところで，

本当に生まれた生まれ故郷と，今生活しているここも含めて，大切なまちだというふうに思っていただいているのではないかと思うのですが，そのような子どもたち，ほかから移り住んで来られている子たちの，そういった視点も含めてですね。このシビックプライドを育んでいくということに関して，思うところがありましたら教えていただければと思います。

〔原委員〕

まずですね，この計画を見させていただいて，キャリア探検ラリーは非常に良い取組だなと思いました。これ，地元にどういう会社があって，ということをまず知るとかですね，本当に素晴らしいことだなと思っています。

笑顔サミットとかいろんな企画があって，すごく魅力的だと思うんですが，私も高専で，そういう企画をするんですが，参加する方はごく一部であり，意識の高い方ばかりなんですよね。そういう人たちはある程度，自分の地元が好きでありますが，一方関心のない人は全く，参加しない。そういうことがありまして，私が思うのはやっぱり地域の特色とかそういうものを学ぶこと，それを教育のカリキュラムにも入れ込む。やはり全員が学ぶということを少し強化する必要はあるのかなと思うんですね。自由参加のものだと，関心のあるものばかりということになってしまうんですね。

そう思うと，例えば，今日の資料の２ページのですね，「地域学習の取組等」で，私の子どもの頃の経験を思い出しますと何か副読本が配られて，でもあまり副読本について中学校の先生も一生懸命やらなかったし，中身もあんまり面白くなくてこれ読んだっけっていうような，そういうケースが多かったように思います。

ひたちなか市のことを副読本で作られているということなんですが，これはどなたが作られて，誰がそれに対して意見を言いブラッシュアップをして作られていくのか，教えて欲しいなと思ったんですが。

〔教育委員会指導課〕

副読本を作成しているのは，市内の社会科免許を持つ教員が集まり，作成をしている状況です。監修は特に行っていないので，どのような情報が必要なのかとか，授業でどういうふうに教えるべきか，というところを検討しながら作成し，各学校生徒，児童に配付している現状です。

〔原委員〕

そうであれば，ぜひ作成過程のなかに，教育委員会もそうですが，その地元の企業の方とか，そういう方に事前に見ていただいてですね，副読本の内容を充実させて子どもたちが興味を持てるように，レベルを上げた教材を出せると子どもたちも関心ももっと持つのかなということを感じました。

〔大谷市長〕

副読本を通じて地域のことをよく知ってもらえれば興味も出てくる。あとは，意

外なところにこんなすごい人がいたんだという驚きがあったりとか，そういうこともあるのかなと。

副読本を市内の社会科教員が作っているというお話をいただきましたけれども，ブラッシュアップのために何ができるのか，広く意見をいただくような体制ができるのか，非常に参考になるご指摘をいただいたのではないかなと思います。ありがとうございます。

あとやっぱりお話を聞いていて，自分が積極的に関わる人は放っておいても関わっているんだけど，そうでない人たちを強制ではなく，どのように心のスイッチを押していくのかということが非常に大切なんじゃないかなと思うのですが，大塚委員は，地域の様々な行事に参加をされていたり，沢山の工夫をされながら関心を持ってもらう取組を一生懸命やってられるんだろうなと思うんですけれども，裾野をどのように広げていくのか，もしくはどのようなところに心のスイッチがあるのか，保護者目線で考えることはもちろん，全く関係ない話でも構いませんのでお話をいただければと思います。

〔大塚委員〕

２つお伝えしたいことがございまして，まず，娘にですね「ひたちなか市好き？」って，聞いたんです。昨晩，この会議がございますから，娘に対して，「結婚して子どもを産んだとき，あなたはまだここに住みたい？」と聞いたら，「お母さん，ひたちなかを離れるにはもったいないよ。」って言ったんです。「何で？」って聞いたら「キャリア探検で，ひたち海浜公園に行きまして，その担当の方が余すことなく，もう海浜公園の魅力をいろいろ説明してくださって，ネモフィラが綺麗で楽しい，遊び場所がたくさんの海浜公園がある。このひたちなか市で自分の子どもも遊ばせたい。」ってことを言っていまして。うちの娘は小学校で１日も休んだことがなくて，ラーケーションという事業があるというのを伝えたんです。そしたら，「いや，そんなの使わない。学校に行きたいんだもんって。」それでこれはなんでだろうと思ったら，自分が通っている学校が大好きで，担任の先生も大好きで，子ども会のイベントも楽しい，ということで，たくさん６年間，幸せの体験をたくさん積ませていただいたんだと思うんですよね。ですので，魅力的な事業もそうですし，先生方もうちの娘の心を鷲つかみにしてくださった６年だと思うんです。その１日１日の幸せな体験がやっぱりこのまちに住み続けたいなっていう気持ちをどんどん強くしていくと思うんですよね。それがまず１つですね。

もう１つ申し上げたかったのは，私は国際交流協会の方のボランティアに参加させていただいているんですけれど，外国籍の方がひたちなかに増えていると伺っております。そういう方ってやはり日本語が不自由で，どんどん市の方でもサポートして，ひたちなか市に来てよかったなって，何かそういう気持ちになっていただく。

あと，私昨年ＰＴＡアワードに参加させていただいて，市長が基調講演をされて

いまして，その内容がすごく興味深かったものですから，レジュメにして，ＰＴＡ役員の皆さんに共有をさせていただいております。その時に市長がおっしゃっていた言葉で「１日２４時間，そのうち３％，４０分ぐらい。地域，人のために，使っていただきたい。」っておっしゃったんです。私は，この言葉ってものすごく大切で，その好きな人，やりたい人はどんどんやっていくんですけれど，学校生活においても，スクールサポーターとして，小学校にボランティアにいらっしゃる方，もともと何も積極的ではない方がボランティアに参加して楽しいと思ってくださる方がおられて，役員活動なんて全く興味関心のなかった方が，今度中学で，ぜひ一緒にやってみたいって自ら言ってくださったんですよね。

だから，そういうちょっとした取っかかりにより，どんどんシビックプライドを大きくしていくと，好きでも嫌いでもないような中間層，どっちでもないなっていうような方々に好きになっていただくっていうのはすごく可能性としては大きいと思います。

〔大谷市長〕

木曜日に放送されている「アイラブみー」というアニメなんですが，嬉しいとか悲しいとか何となくわかるけど，それがなぜか上手に言葉にできないとか，それって人に説明できない子どもたちにもよくあることだと思うんですよね。そういった心のもやもやの何かというものを，周りの人が無理矢理じゃなくて言語化するとか，それってこういうことなのかとか，そういうことをちゃんと心の中でしっかりと見つめていく，それが好きだとか気持ちよいとか心地よいとか，そういうことも含めてしっかり認識をしてもらうような声かけ，もしくは子どもたちにそういった発言を持ってもらうような場を作っていく。それで自分が認識をしていくっていう，そういうやりとりの繰り返しが非常に大切だなと思いました。

あと１日２４時間の３％だけ，実は今年の商工会議所の賀詞交歓会でも同じ話をしておりまして，やっぱり共助とか，自分が何かやれば，他の人は関係ないんだっていうけど，例えば水道蛇口をひねれば水が出るから，その後ろに誰か頑張ってくれている人がいるんだ，何か食べてゴミを出せばゴミが無くなっている，誰かが支えてくれているから，自分が１人の時間が過ごせるんだと，全く１人ではないんだっていうことも含めて，自分は他者とかその誰かのために，時間を使っていこうよという，その時間を使っていくことによって色んな感情が入ってくるとこういう循環もね，シビックプライドに非常に繋がるのではないかなと思っています。

産業界においては，子どもたちがひたちなかで育って，地域と企業を大切にしてもらう。そういったことがやはり大切なのかなと思います。鬼澤委員はひたちなか市が地元だということで，外に出て初めて分かるような比較がないから，なかなか難しいというところもあるかと思いますが，教育から少し離れたなかで，鬼澤委員が思うところ，また地元に生まれたからこそ，何かそのようなことがあったら教え

てもらいたいです。

〔鬼澤委員〕

私は結構海外に行く機会もありましたし，２０代に２年ぐらいアメリカにも行っていたことがあるんですけども，海外行ったときに，自分を表現するときにですね，地域の特徴は何なの？っていう話になることがあるわけですね。もちろん自分自身，地域の干し芋を作ってるよって，このネタってすごく大きいわけです。自分のアイデンティティが試されちゃうので，その時，地域の誇りみたいなものをちゃんと持っているかが実は海外に行くと思い知らされると感じていますね。

あと，当社では工場をこの２年ぐらいかけてかなり改装して，実は加工場もパック場も外から見えるようなかたちに改装したこともあって，結構いろんな方が見学に来ていただくのですけれども，茨城県内の６０人くらいの小学生が当社訪問，干し芋加工とかパック詰めを見ていただいたり，先日は那珂湊幼稚園の２歳児から３歳児が６０人位，外から見ていただいたりってやっていたんですけれど，来ていただいたお子さんたちで何をするかっていうと，干し芋を食べていただきます。食べていただいたあとに，干し芋の話をね，１０分ぐらいさせていただくんですね。

私も実は干し芋の歴史に関して疎かったことがあって，今から１７年前の話ですが，ある人に出会い「鬼澤さん，干し芋のこと本当に分かってる？」って干し芋を見ながら言われましてね。「なんで干し芋ってこの色してるの？」，「何で干し芋ってこんなシワシワなの？」っていうのを沢山質問してくるんですよね。

その質問に対して何も答えられなくて，「鬼澤さん，もう１回足元深く掘り下げてください。」って言われて，実はそのあと２年かけて，あらゆる干し芋に関わる人たちに会って，情報を集めて，４００ページの干し芋学校という本を作りました。

その経験によって，私たちは干し芋の歴史から始まって，色々なことを深く知ることができたんですね。今その自分たちが培ったものを次の若い世代，小学生でもいいし中学生でもいいし，伝えようということで，まずは食べてもらう。最初から歴史だとか言うと，抵抗されてしまうので，まずは食べていただいて，普通に美味しい，これは一体何でこういうことが起こったんだろう，ということを話し出すと興味を持って聞いてくれるということが，実体験としてあります。

この干し芋産業はこの地域が産んだ１つの素晴らしい産業で，うちは家族４人で会社をやっています。昼食のとき，いつもその話になってしまうのですが，まさに誇りっていうと，干し芋があって，このひたちなか，那珂湊，勝田，色々な歴史の中で育まれてきたものを，次の時代にいいかたちで継承していくことが，その人たちのこのシビックプライドの１つをつくり上げるのではないかということで，一生懸命これからもずっとやっていきたいなと思っています。

〔大谷市長〕

今お話を聞いていて２つ，私も海外行くことが多かったですけども，環境を変え

ると見えてたものが違って見えるという体験はやっぱりあると思うんですよね。実際にそういった場所に行くのが良いとは思うんですが，違った文化の方々と接する機会は，ひたちなか市は多様にあると思うので，そういうチャンスをどういうふうに生かしていけるのかというのは，工夫のしがいがあるだろうなと。

それともう１つはですね，私もテストを受けて，答えを書く。効率よく正しく答えを書くというそういう勉強してきましたけども，問うということをもっと大切にしていく必要があるのかなと改めて思いました。

「どうしてなんだろう。」，「何でなの？」，その問いをいかに作っていくかということが，探求へのモチベーションになっていくということを考えると，効率よく答えを見つけるということではなくて，不思議に思ったものにきちんと問いを作るということが，そのものを知ることになり，シビックプライドに繋がっていくとか，いろんな感情の成長に繋がっていくということにもなるのかなと。改めて，その問いの大切さを今感じたというところでございます。

佐藤委員，これまでの話も踏まえてですね，ひたちなか市の子どもたちが学校の中でやっていくべきことを，学校の現場というところに焦点をあてて，思うところがあれば教えていただきたいんですが。

〔佐藤委員〕

私は保育園で園長をしています。おはようって部屋に入っていくと，１歳児２歳児０歳児がぴょんぴょんはねるんです。ワーッて寄ってきて，嬉しい表現なのかな。そう表現されると，私も嬉しくなっちゃって，高い高いしちゃうと，後に行列がずーっと並んでしまって，それが教育の原点なのかなと思います。

話がちょっとずれるんですけども，そんな思いを持ちながら，学校の先生って，教科経営と学級経営の２本柱で行っているんですね。

教科経営は，算数，理科，社会など技術を学びます。

学級経営の中には特別活動といって，学級会もあるし，ボランティア活動，いろんな人を呼んで，或いは自分たちでボランティアやってみようかって言うような，そういう感覚を育てる学級経営が上手な先生と学級経営が苦手な先生がいます。

学級経営が上手な先生に教えていただけると，学校大好きってなっていくと思うんですよ。いかに学級経営を上手にやっていくか。

そういう先生を育てていくことが子どものシビックプライドに繋がっていくのかなと思います。

〔大谷市長〕

今お話を聞いてですね，感想としてお伝えしようと思うのですが，これからＡＩとかいろんな技術が発達してきたり，教育プログラムが開発されていくと，自分の持ってる知識を効率よく相手に移転していくという能力だけをもって教師だとする

と，多分ＡＩの方が効率よくうまくやっていく。どこでつまずいてるかを分析して，そこまで瞬時に戻っていって，やり直すということが非常に高いクオリティでできるんだろうなと思います。

ただ，そこに向かわせる気持ちをどういうふうに作っていくのか，という部分はＡＩでもできるんだと思いますが，ここは人にやっていただきたいなっていう気持ちもあります。

あとやっぱり学校の現場ということでいうと，地域の人たちも地域を知らなきゃいけないし，学校の先生もその赴任してる地域を知っていただきたいと思うわけですよ。子どもたちと一緒に学んで欲しい。知っているから教えるではなくて，一緒に問うていけばいいんじゃないかなと。関心を持っていただく。そのための情報提供を，市としてたくさんやる。こういうことが必要で，先生はあそこのまちから来たよ，でもこのまちは初めてだから一緒に知っていこうよっていう，そういうことを投げかけていただいて，先生と子どもたちが一緒に探検をしていただくということも，すごく大切なのかなと思いました。

時間も迫ってきちゃったので，これだけは発言したいということがあったら，いかがでしょうか。

皆さんの意見が出尽くしたということで，本来，この総合教育会議は私が最後にまとめるべきだとは思うのですが，私もちょこちょこ意見を述べさせていただいておりますので，秋本教育長，今日の総括としてまとめていただいてもよろしいでしょうか。

〔秋本教育長〕

部活動の地域移行につきましても，これからの時代は，学校だけで完結する話は有り得ないのでまち全体が学校なんだ，だから地域の方々にもお手伝いいただいてやっていくしかないということが，自ずと結果的には働き方改革にも繋がっていくのかなと感じております。その文脈で，先ほど皆様方から頂戴しているお話を総合すれば，シビックプライドというものは，自ずと醸成されていくのかなと安心をさせていただいたところです。

１つだけ言葉を使わせていただければ，先ほど学級経営とか，いろんな話が出てましたけれども，自分たちの集団のなかで，いじめが起こるということは恥ずかしいことだよねというような，傍観していられないような，そういう集団を作ることが，いいまちをつくることに直結していくと思います。

ですので，先生から決めていいよって言われるその幅の中のことにおいては，子どもたち自らで決めさせる。やはり自己決定の経験というのをさせてあげて，だからこそ，自身で決定したことを守る責任っていうのが生まれるんだと思うんですよ

ね。

本市の小中学校に対しても，次年度は，自分たちで決められるところは決めさせて，守る責任感を養っていただきたいと思っています。

【５．閉会】（西野総務部参事兼総務課長）